盗賊の子守唄

とつ

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=8996626

DQ11, カミュベロ, ドラクエ11, 子守, カミュ, ベロニカ

唄は歌いませんが、子守をするカミュとベロニカのお話です。
子守をするシーンはとあるゲームのワンシーンからお借りしました。

デートと子守唄を両立させたいなぁと思って書いていたら、あれやあれやと変な方向へ、、、

少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

盗賊の子守唄

久しぶりの休みであった。

小さな町ではあったが、辿り着いた町の人々は皆人当たりもよく、十日間連続でキャンプと同日連続での勇者のシチュー、魔物の連日の襲撃によりそろそろ辟易していた一行にとって、たまたま探しあてたこの町は、まるでサマディー砂漠に点在するオアシスのようであった。

皆で宿で夕食をとり風呂に入った仲間たちは、その日はあっさりとそれぞれ寝室に戻っていく。

カミュ自身も、宿の厨房からちょろまかした少〜し高価そうなお酒で晩酌した後は、疲れも手伝ってか、すぐに微睡みがやって来て、眠りの世界に誘われた。

翌朝も、窓から射し込む暖かな光に包まれ、とても寝覚めもよく、良い一日になるだろうな、と柄にもなく思ったものだ。

身体を伸ばしながら一階へ降りて行くと、既に起きた仲間たちが食堂で朝食をとっていた。

「おはようございますカミュさま」

「おう、いい朝だな」

「あんたも大概寝坊助ね。いつまで寝てんのよ」

朝から優しい声の聖賢の妹と、朝っぱらから突っかかってくる聖賢の姉。

うるせえなぁ、と小さなお姉さまの横椅子に腰掛け、彼女の皿に乗っていたサンドウィッチをひとつ摘んで口に放り込む。

「あ！あんた！あたしの楽しみに取っておいたタマゴサンドを！」

「んー？あぁ残してるからいらねーのかと思ったわ。早起きなんだからさっさと食べとけよ」

「むきーっ！なんですってー！？」

朝一からぎゃあぎゃあと喚き合うカミュとベロニカの二人だが、仲間達は、犬も食わないと、とくに気に留める様子もない。

いつものことであり、むしろこの口喧嘩なきゃ一日が始まらない、とすら思っている節すらある。

全く微笑ましいものだ。

「んで、今日は何時に出発するんだ？」

両手をぶんぶん回して殴りかからんとするベロニカを片手で適当に抑えこみ、カミュはもう一つサンドウィッチを摘みながらイレブンに尋ねた。

恐らく、自分が起きてくるまでの間、朝食を取りながら今日のスケジュールを立てていたのだろう。

「うん、それなんだけどカミュ」

今みんなで話してたんだけど、とイレブンは手にしていた紅茶カップを机に置いた。

「みんなと相談して、今日は一日休みにしようかなと思ってるんだ」

「休み？なんでまた」

カミュの疑問は最もだ。

世界は突如勇者の星から現れた"黒い太陽"によって脅かされている。

このままでは、ロトゼタシア大陸があの闇に飲み込まれてしまう。そんな状況であるから、勇者一行は各地で黒い太陽の影響によって凶暴化した魔物を退治しながら、力をつけて、邪神に挑まんと息巻く最中でもある。

そんな中で休みなど取っている余裕があるがあるとは思えない。多分、誰もがその話を聞いた時は疑問符がついた筈だ。

が、イレブンは恐らく皆をそうしたように、カミュにも懇々と諭とす。

「ここの処、しばらくキャンプが続いていたでしょ？戦闘も多かったし、みんな疲れてるよね。久しぶりに町らしい町に来れたし、今日一日くらいみんなにゆっくりしてもらおうかなって思って。どうかな？」

「…要はお前が疲れてんだな？」

あ、バレた？と勇者は申し訳なさそうに、それでいて悪戯っぽく笑う。
さもありなん。戦闘でのイレブンの立ち回りは流石勇者と言わざるを得ない。それだけ、疲れも溜まっている筈だ。別に責めているわけではない。

「たまにはいいんじゃないかしら。疲れが原因で邪神に負けたら、死んでも死に切れないわ」

「ふむ、後世の笑い者じゃろうな。休める時に休んでおくべきじゃろうて」

マルティナとロウは勇者の意見に賛同を示す。二人がこう言うので騎士グレイグも反対はしないだろう。

「そうよん！一日ぐらい休んでも、邪神ちゃんだって許してくれるわよ。それに…今日はこの町のお祭りもあるって話だし、少しくらい羽を伸ばしてもいいんじゃないかしら？」

「あ？祭り？」

シルビアの邪神ちゃん許してくれる理論はよく分からないが、その後の話の方がカミュは初耳であった。

「あんた、何も聞いてないのね。昨日夕飯頂いている時に女将さんが、年一度のお祭りが今日の夜あるって言ってたじゃない」

「んー？そうだっけか…」

食べ物の恨みは恐ろしい。相変わらずジト目で睨んでくるベロニカだが、カミュは聞いたこともないというような顔だ。

それもそのはず。その話を仲間たちが女将から聞いていた頃、カミュは厨房に忍び込み、晩酌の為の酒を見繕っていたのだ。

多分、あの時だろうなと、ふと思ったものの、口にすればどんな非難が飛んでくるか分かったものではないので、そのまま知らないフリで通す。

「楽しみですわね。お祭りの途中で花火も揚がったりするらしいですわ」

「へぇ、なかなかしっかりした祭りなんだな」

セーニャが子供のように眼を輝かす。

「ほう、花火か。デルカダール以外では観たこともないな」

感心するグレイグの言う通り、確かに花火など、めでたいことが起きた時に盛大なお祝いで揚がったりするくらいで、地方のお祭りなどではなかなかあるものではない。

まあ、大国の夜空に揚がるそれとは規模はまるで違うだろうが、それでもそう観れるものではないだろうから、はしゃぐセーニャの気持ちも分からないでもない。

「それは是非観てみたいわね。お祭りも夜だし、それまでゆっくりしましょうよ」

マルティナの発言に、皆同意見のようであった。

まあ、祭りだなんだ、というのはさておき、一日休暇を取り、英気を養いたいと思っているのは、イレブンだけではないということだ。

そもそも勇者がその気であるなら、カミュに反対する理由はない。

「ま、なら今日はゆっくりするか」

ーーーーー

ふあぁ。

ベッドに寝転んだカミュは欠伸を漏らした。青い瞳には小さな水玉も浮いている。

「暇だな…」

休暇だ！と突然言われても、いきなり予定を立てるのはなかなか難しく、特にやることはあまり無い。

朝食後、少し町に出て旅に必要な道具などを揃えた。

町は夜に祭りを迎えるために、人々はなんとなく忙しなく、期待からかそわそわしているようであった。

そんな中で町をぶらぶらする気にもあまりならず、宿に戻り、得物の二本の短剣を手入れを行う。

それも早々に終わってしまい、それでもようやく昼過ぎといったところで、することのなくなったカミュはベッドに寝転んだ。

仲間達はどこに行ったのだろうか。

女性陣とシルビアは、スイーツ巡りにでも行ったのだろうか。

逆にシルビアを除く男性陣が、こんな日に何をしているのか逆に気になったりする。

彼らが何をしているのか一人意味もなく想像していた。

そんな中、あの赤い帽子を被った少女が、ふと脳裏に過る。

仲間の女性達ーープラスおっさん一人と、スイーツを食べながら話に花を咲かせるている。

それは、使命を抱える聖賢の魔道士ではない、普通の女の子。

楽しそうにしている彼女の笑顔が、とても眩しかった。

そんな彼女が自分に気付き、その笑顔を自分に向けてーーーー

(アホか、俺は)

都合の良い想像はそこで無理やり打ち切られ、彼はその双眸を手のひらで隠した。

何故そんなことが脳裏に過ったかなど考えないようにした。それを認める資格など、過去の卑しい自分にはないのだから。

今のままでよい。口喧嘩しても互いに信頼しているくらいが丁度いいのだ。

(昼寝でもするか)

窓から覗く日の暖かさも手伝い、微睡みがやってきた頃。

こんこん。

カミュの部屋の戸を叩く音がした。

「いるぜー勝手に入りな」

起きるのも面倒だったので、声だけで来訪者を促す。どうせ仲間の誰かだろうと思っていた。

だが、来訪者はカミュも全く想定していない人物であった。

「あーあんた！居たんだね、助かったよ！」

「…は？」

ドタドタと足を鳴らして入ってきたのは、宿の女将であった。昨日祭りのことを仲間達に教えたお方である。

確かに彼女の経営する宿屋なのだから、入って来られても文句は言えないが、入っていいといったとは言え、ほぼ遠慮なくお客様の部屋にずかずか入ってくるところをみるに、なかなかの女傑のようだ。

「えーと…宿代の支払いか？それなら俺じゃなくて連れにいた髪のサラサラした男に請求してくれ。俺は財布を握ってなくてね」

「違う違う。支払いは宿出る時でいいよ。ちょっとね、あんた達に頼みたいことがあったんだけど、お仲間さん、みんな町に出ちゃってるみたいでね、誰も部屋にいなくて。あんたがいて助かったよ。ちょっと用を頼まれてくれないかい？」

…これは面倒なことに巻き込まれるかもしれない。
カミュの経験に培われた勘がなんとなくそう告げていた。

「あー悪い、俺も出かける処でな。世話になっといて悪いが、別を当たってくれ」

「何言ってんだい嘘をつくんじゃないよ。今あんたまさに寝ようとしてたんだろ？欠伸の跡が目端に残ってるよ」

この女将、なかなか鋭い。

よく見てみるとこの女将、なかなか顔立ちもよい。それに恰幅は良いが、太っているというよりは肉付きのよい、まさに出来る宿屋の女将といった処だ。

色んな客を接客してきたのだろう。カミュのその場凌ぎの嘘くらい、訳なく見抜いていた。

「それでも…俺が手伝わなきゃいけねえ理由はねえだろ？大体、俺は客だぞ？」

「いや〜あんたにはあるんだよ。これは何かねェ？」

そう言うと女将は怪しく笑い、酒瓶を取り出した。

カミュは天を仰ぐ。

この女将、本当にやりやがる。

女将が持っていたのは、昨夜カミュが拝借した酒の瓶であった。正直もう忘れていた。

「うちは客商売だからねぇ。お客さんを泊めることはあるけど、泥棒を泊めたりはしないよ？」

バレている。完全に。

カミュも下手な抵抗はしない方がよいと考え、ベッドに腰を下ろし、ガシガシと青髪を掻いた。この男の癖である。

「お、言い訳しないのかい。潔がよいね。それじゃあ言うこと聞いてもらおうかね」

「ちっ、客に手伝いさせるなんてどんな了見してる宿なんだ？」

「そう言うんじゃないよ。あんたが手伝ってくれたら、今日の宿代は5割引にしてやろうじゃないか」

8人の宿泊で朝食付き。これが5割引になると言えばかなりの好待遇だ。多少仲間にも大きな顔が出来るであろう。

逆に断れば、事の次第を仲間に報告され、カミュの信用は失墜するだろう。下手をすれば宿から追い出される可能性もある。

休日の最後の最後に宿を追い出される。それだけは避けたかった。
ベロニカから何を言われるかなど、考えたくもない。

「…よし、乗った。それで？何を手伝えばいいんだ？」

その回答に、女将はニカッと笑顔を見せた。
こうなったら男に二言はない。

そう思って引き受けたのだが。

カミュは、体裁などに拘らず、この時逃げ出しておけば良かったと、すぐに後悔することになる。

ーーーー

フードを深く被った男が、町の通りを歩く。

町行く人々を巧く避けて、その身が人に当たらないように。

その足運びは、出来るだけ目立たないように、という流石は元盗賊の歩き方であったが、それ以上に、過剰に何か大事なものを護っている、というようにも見える。

(こんな姿、あいつらに見られたら笑いダネにされるだけじゃすまねえぞ！)

盗賊カミュは、いつになく真剣にーーどちらかというとそわそわと周りの目を気にしている。

そんな彼の腕の中には、彼と同じように、まるで隠すように布に包まれた何かが、ぎこちなく抱かれている。

カミュはそれを、さも珍しい伝説の財宝でも扱うように、最大限の気を使いながら人混みを避けて進んで行く。

「ウウ…」

突然、包まれた布の中から小さく呻いた声が聞こえた。

ヤバい、と直感で思った。

もぞもぞと布の中から、これまた小さな可愛い手が二つ姿を現わす。

(頼む、こんなところで泣くなよ？泣くんじゃねえぞ？？ほーら、ほーら…)

愚図り始めた"それ"に、カミュは一度立ち止まり、腕をこれまたぎこちなく、ゆりかごの如く揺らしてみる。

しかし、カミュのそんな努力も虚しく。

「……うぅあぁーん！！」

その武骨な腕の中で、赤ん坊が堰を切ったように、泣き始めてしまったーー。

ーーーーーー

「……なんだよ、これ？」

「私の子供だよ」

「へぇ可愛いな…って、そうじゃねえ！なんで俺があんたの子供をおんぶしなきゃいけねえんだ？！…痛でで！？髪を引っ張るな！」

宿の一室にて、カミュは女将の赤ん坊をおんぶしていた。否、させられていた。

天使のように可愛い赤子は、カミュに背負われ、珍しいものを見たというような顔で、きゃっきゃっと喜びながら青いツンツン髪を引っ張っている。

悪意がなく、とりあえず可愛いからたちが悪い。

女将もこらこらと窘めているが、本気で止める気は全くなさそうだ。

「ごめんよ、今日の祭りの準備で、どうしてもこの子の面倒見切れなくてね。旦那も出突っ張りなもんだから、今日一日だけ預かってくれるかい？」

「断る！無理だ！」

想像以上に面倒なお願いであった。

一人で旅をしていた頃の経験からか、カミュは何事も卒なくこなす。

それは今の旅の道中でも、その力は遺憾無く発揮されており、炊事、洗濯、狩りに水源確保…等々、野宿生活ではカミュの経験による功績は大きい。

特に見た目に似合わず、料理の腕は一級品ときている。彼自身は勇者のシチューで普段は十分満足しているため、腕を振るうことはあまりないが、たまに作る料理のその味については誰もが認めるところである。

そのため、カミュ自身も何事も卒なくこなしているという自覚が多少はある。

あるが、これはいけない。

赤ん坊など抱いたことはないし、ましてや面倒など見きれるものではなかった。

「いいんだよ、適当に遊んであげて、寝付かせてあげれば。大丈夫大丈夫、あんた目つきは悪いしぶっきらぼうに見えるけど、見た目と違って思いの外優しそうだし、うちの子供がもう懐いてるよ。それとも…前言を撤回するかい？」

女将は片手に持っていた酒瓶をこれ見よがしにゆらゆらと揺らす。

カミュは押し黙ってしまった。
流れでかなり失礼なことを言われている気がするが、この際そんなことは問題ではない。

「いや、だがなぁ…俺は赤ん坊の面倒なんか見たことが…」

「シャキッとしんさいな！あんたも男ならいずれ所帯を持って子供を抱くんだ！そんな時に赤ん坊一つ面倒見れなかったら奥さんに愛想尽かされるよ！」

ビシッと指を刺されて、思わずカミュは背筋をピン！と張ってしまう。自分は、この手の女は苦手だなと改めて思った。

「じゃあ、頼んだわよ！ああ、忙しい忙しい…」

そう言って女傑の女将は、嵐のように部屋から出て行ってしまった。

部屋に残されたのは。呆けたように立つ可哀想なカミュと、だぁだぁと相変わらずカミュの青髪を軽く引っ張る可愛い赤ん坊の二人。

「せめて名前くらい言っていけよ…」

とりあえず、ヒョイと赤ん坊をベッドに下ろして座らせ、自分もドサリと隣に腰を下ろす。
カミュの座った反動で、赤ん坊が、ぽよんぽよん、とベッドから浮

き沈んだが、どうやらそれが楽しかったのか、至極楽しそうに喜んでいる。

全くツボがカミュには分からなかった。

何をする訳でもなく、カミュはそんなはにかんだ赤ん坊の顔を観察するように見る。

ーーーあんたも、いずれ所帯を持つんだーーー

先程、女将に言われた言葉。そんなものは、全く想定の出来ない未来であった。

期待もしていないし、縁もないと思っている。

奥さん？子供？家族？

親の顔も浮かばぬ自分には、妹のマヤしか家族はいない。それも、恐らく世間一般でいう家族という関係とはかけ離れているだろう。

一日一日を生き抜くも精一杯だった。ゴミ溜めのような場所で泥水を啜り、腐りかけの食べ物で生を繋いだ。

マヤと共にバイキングに拾われたあとも、散々にこき使われる毎日。とてもまともな生活とは言い難かった。

そんな中でマヤは間違いなく家族であったが、幸せを共有する、というよりカミュにとって守るべき唯一の存在であった。それが当たり前だと思って生きてきた。

仮に。

自分が誰かと結ばれ、女将の言う通り所帯を持ち、子供を授かった時に。

彼らに幸せをする自信など無かった。

知らないのだ。
家族を持つと言う幸せがどんなものか。

「だぁ！」

ふと我に帰ると、赤ん坊が自分の膝下までやって来て、不思議そうな表情でカミュの顔を覗き込んでいた。

その澄んだ瞳は穢れとは程遠いもので。

「やれやれ、ホントに俺のこと好きなのか？」

女将の言っていたことも満更ではないのかもしれないと思い、軽々と赤ん坊を抱き上げる。

「ほら、こうやるのか？高い高い〜っだ！」

カミュは赤ん坊を自分の頭より高い所へ持ち上げてやる。

思いの外、無垢な赤子は喜んでいるようだ。

きゃっきゃっと嬉しそうな声を上げている。

(へぇ、可愛いもんだな)

しかし。

突然なんの前触れもなく、カミュの頭上から綺麗なーーとても綺麗な水が降り注ぐ。

「おわっ！？」

赤ん坊はもう愚図り始めていた。

ーーーーー

赤子の聖水というか洗礼を頭上から浴びたカミュは髪を洗った後、町へ出ていた。

宿に居たのでは、誰か帰って来た時に見つかる可能性がある。

本来は逃げ隠れする必要はないのだが、話をいちいち説明するのも面倒だし、何より子守なんぞしている姿を晒したくなぞなかった。

恐らく、彼らは爆笑するだろう。天下の大盗賊カミュたる者が子守をする姿など笑い話でしかあるまい。

深々とフードを被り、赤ん坊を布で包み、誰にも見られぬように警戒しながら歩く。

だが、町といってもそう大きくない町である。

カミュは、何度も仲間とすれ違いそうになり、その度に脱兎の如く逃げ出して道を変えた。

イレブンとセーニャがスイーツ店に入り、大きなパフェを二人で和やかなムードでつついている。(マジかと色々驚いた)

シルビアが大通りで人集りの中、大道芸を繰り広げていたので、大通りを避けて進む。(休日であっても人々の為に芸を披露するシルビアは流石だと思う)

マルティナの買い物に、大荷物のグレイグが付き合っている。(嫌な顔一つせずに荷物を持つグレイグに、騎士の心意気を感じた)

ロウは町の本屋で何やら立ち読みしている。(あのニヤけた顔を見れば何読んでるかぐらい想像がつく)

仲間達が休日に何をしているかという疑問が回収出来たのは予想外の収穫であったが、逃げ回らなければならないというのが、なんとも哀れである。

(はあ、何やってんだ俺は…)

思わずため息が出る。

仲間はそれなりに休日をエンジョイしているらしい。
それに対し、慣れぬ子守をさせられる盗賊の休日は、悲しいかな、疲労は溜まる一方である。

しかも、ここに来てさらに大きな問題が発生している。

赤子が泣き止まないのだ。

「おいおい、どうしちまったんだよ…？」

先程おしっこを引っ掛けて来た時に愚図った際は、あれやこれやでーー思い出したくもない事もたくさんしたのだがーー泣き止ませ

ることに成功した。

しかし町へ出てから愚図る回数が多くなり、いよいよ本格的に泣き始めてしまった。しかも高い高いや変顔では泣き止みそうもない。

こうなると赤ん坊の知識のないカミュにはお手上げであった。

「うぁぁあああーん！うぁぁあああーん！」

「だぁー！こっちが泣きたいぜ！頼む泣き止んでくれ！」

横揺らしやら、なでなでやら、色んなことにチャレンジしてみるも、効果はないようだ…。

ぐぅ。

そんな時、場違いにカミュの腹が鳴った。

そういえば昼飯を食べていない。朝もサンドウィッチを数切れだ。

もう昼の時間を大きく過ぎているので、腹の虫が鳴くのも無理はあるまい。

(こんなことになるなら、宿出てさっさと昼飯でも食いに行くんだった。とんだ休日だぜ、くそっ！)

だが、泣き止まない赤ん坊をどうにかしないと昼飯にはありつけそうにない。

だが、そんな時。

(…もしかして)

いや、そんな時だからこそカミュの頭にある考えが閃いた。

「そうか！おまえも腹減ってんだな？よし、何か食わせてやるぞ！」

本来は母乳で育つお年頃なのだろうが、親があれでは今は頼めまい。カミュでは論外だ。

であれば、何か買って食べさせれば良いのだ。

カミュは周りを見て食べ物の売っていそうな店を探す。

幸いにして、直ぐそばに小さな果物屋があった。

「よしよし、いい子だからな。ちょっと待ってろよ？」

泣き止まぬ赤子を抱きながら露店に近付き、真っ赤に熟れたりんご

を一つ手に取った。
それを店主に渡し、会計をしようとしたその時である。

「まさかあんた…そんなもの食べさせようって言うんじゃないでしょうね？」

ギクリ。

背後から、よく聞いたことのある、今一番会いたくない手合いの声。

自分でも顔が引きつるのが分かる。

ぎぎぎと壊れた人形のように、ゆっくりと振り返って後ろを見てみると。

そこには、怒ったような、呆れたような顔をしたベロニカが、粉ミルクの袋を持って立っていた。

ーーーーー

「全く、信じらんないっ！まだ歯も生え揃えてない赤ちゃんが、りんごみたいな固いもの食べれる訳ないじゃない！」

「知らねぇよ！子守なんたてことしたことないんだからな！」

「あんた赤ちゃんに関してはひよっこ以下ね。たまごよ、たまご。たまごクラブから始めなさいな。」

「意味分かんねぇわ！」

二人は赤ん坊を連れて、町の中心から少し離れた小高い丘に移動し、火を起こして水を温めていた。

ベロニカの持っていた粉ミルクで赤ちゃんのミルクを作ろうというのだ。

軽い口喧嘩をしながらベロニカがミルクを作り、カミュが愚図る赤ん坊をさすったりする。

「ほら、出来たわよ。早く飲ませてあげなさい、たまごちゃん」

「ちっ、勝手にしろ」

ベロニカから温かいミルクの入った哺乳瓶を受け取ると、カミュは赤子を膝抱きにし、その口元へ運んでやる。その動作がいちいちぎこちない。

しかし。

「あら？飲まないわね」

「おいおい…なんだよ、腹が減ってんじゃねえのか？」

愚図る赤子はいやいやと首を振り、ミルクを飲もうとしない。

それを見てベロニカはふと気付いた。

「もしかして…ちょっと貸して」

「え？あ、おい！」

半ば強引にカミュから赤ちゃんを引き離すと、
ベロニカはそれを優しく抱き上げた。

軽く上下に揺らしたり、背中をさすりながら、小さい身体に似合わぬ器用な動作で赤ん坊をあやす。

カミュは哺乳瓶を持ったまま、それを見ていることしかできない。

暫くすると、少しずつだが愚図りが治まってきた。

「…やっぱりね、お腹が減ってる訳じゃないんだわ。眠いんだ、この子」

「眠い？」

そんなこと、考えもしなかった。

「こういう時は優しく抱っこして、しばらく待つしかないのよ」

「それだけか？マジかよ…」

自分の努力はなんであったのか。

カミュは首をコキコキと鳴らしたり、肩を揉んだり腕を伸ばしたりした。慣れぬことに全身が凝っている。

そして本日何度目か分からぬため息をついた。

ーーーーー

それから赤ん坊が完全に寝付くまで、あまり時間はかからなかった。

ベロニカの言っていたことは、正しかったということだ。

赤子はベロニカの腕の中で寝息を立て、ベロニカはそれを優しく撫でる。

それは、まるで母と子の様。

赤ん坊を見つめるベロニカの菫色の瞳は、慈愛に満ちたものであった。

カミュは横に寝転がり、そんな二人を見ている。

「やっぱり赤ちゃんって可愛いわね」

その背中を優しく撫りながら、ベロニカが呟いた。

「誰だって生まれる時はお母さんのお腹から産声をあげるのよ。どこかで失われた命が大樹の導きで再び誰かの許で芽吹く。そうやって命は輪廻していくんだわ。改めて考えると、壮大で素敵なことだと思わない？」

「おまえは」

カミュはその質問には答えなかった。

「赤ん坊あやすのが上手いな。初めてには見えねえ。」

ベロニカはニコリと笑う。

「ラムダではね、生まれてくる赤ちゃんを皆んなで祝福するの。大樹に感謝の意を伝えるのと、またどこかで新たな命が芽吹くようにって願いを込めてね」

そう言って彼女は眠る赤子に瞳を落とした。

「だからあたしセーニャも、何人もの赤ちゃんを抱っこしてあげたわ。だからでしょうね、赤ちゃんをあやすのは好きだし、少しだけど赤ちゃんの気持ちはわかる気がする」

「なるほどな。おチビ同士気持ちが通じるって訳じゃねえのか」

「あんた、ホント一言多いわね。ほら！」

ぷんと憤慨したベロニカは、寝転がったカミュに赤ん坊を差し出す。

「抱っこしてあげなさいよ。じゃないといつまでも赤ちゃんのことわかんないままよ」

「もう充分抱っこはしてやったけどな…」

それでも、ベロニカの小さな身体ではいつまでも抱いておくのは大変だろう。

カミュは身体を起こし、仕方無さそうに赤ん坊を受け取った。

おずおずと、ぎこちなく。

くぅくぅと寝息を立てるそれを、カミュは大切なものを壊さないように、優しく抱える。

すると夢の中の赤ん坊が、満足そうな吐息をふぅとと出した。

そんな赤ん坊をカミュは見つめる。

いつか。

仮に自分に子供が出来た時。

こうやって抱いてやることが出来るのだろうか。
汚れた手で、抱き締めてやることができるのだろうか。

そして、その子供に幸福を与えることが出来るのだろうか。

「あんたもそんな顔するのね」

ふっとカミュは顔を上げ、ベロニカの方へ向き直る。
ベロニカは嬉しそうに笑っていた。

「俺はどんな顔してたんだ？」

「すっごく優しい顔してた。天下の大盗賊が形無しね」

「ほっとけ」

「褒めてんのよ」

そう言ってベロニカは、カミュのすぐ隣へ腰を下ろす。そして彼の

膝の上に、自分の小さな手を重ねる。

「心配しなくても、あんたは充分人を幸せに出来るわよ」

「…俺は何も言ってねえ」

「バカね。あんたの考えてることくらいすぐ分かるわよ。どーせ、自分は幸せになれない、とか、幸せに出来ない、とか考えてるんでしょ」

カミュは黙ってしまった。図星過ぎて何も言えなかったのだ。

このラムダの聖女は、普段は勝気で負けず嫌いで怒りっぽい、それこそ目を離せないことの多いおチビさんだが、本当は誰よりも聡く、人の気持ちに敏感なのだ。

「今目の前にいる子の顔を見てみなさい。とっても幸せな顔してるじゃない。もっと自分に自信を持ちなさいよ、ひよっこちゃん」

ーー分かっている。ラムダのようにこの世に生を受けた命、その全てが祝福されている訳でははないと。

カミュと、その妹のマヤは両親の顔すら知らないのであろう。

それでも、それが人を幸せに出来ない理由にはならない。

家族の幸せなど、誰もが最初から持っている訳ではない。

それは作っていくものだ。そして、それを家族というのだ。

口煩くて、そして近過ぎて気付けないのかもしれないが、マヤにとってはカミュの側にいることが幸せだったはずだ。

ーーあたしだって。

生まれなんて関係ない。汚れてたって構いやしない。

あたしもあんたの側に居られれば、それだけで幸せなのに。

(だって、好きになっちゃったんだから、しょうがないじゃない)

人の気持ちを奪って、このベロニカさまをこんな気持ちにしておいて、肝心なところで卑屈になるんじゃないわよ、このひよっこ盗賊。

ーーそんなこと、口が裂けても言えないが。

(バカミュ！)

言わない代わりに、ベロニカはふわりとカミュに身体を預ける。

彼の身体と触れたところから、その熱が伝わり、それが全身を駆け巡ってゆく。

それは、途方も無い心地よさで。

ベロニカはカミュに身体を預けたまま、その瞳をすっと閉じた。

カミュもそんな彼女を押しのけることなく、自然と受け入れる。

その肩横で、金糸が風に揺れる。

ふんわりと漂う彼女の匂いが、カミュの鼻腔をくすぐった。

(マジかよ…)

腕には赤ん坊を抱え、横には小さな少女に心身を預けられた、ひどく冷静に見えるカミュの頭の中では、その実、混乱の魔法にかかるかの如く、様々な感情が入り乱れていた。

これが、幸せというやつなんだろうか。

これが、人を愛する、ということなのだろうか。

だが不思議と、悪い気はしない。

寝息を立てる二人を起こさぬよう、これまでの人生では考えられなかったゆったりとした時間の流れに、カミュは身を委ねるのであった。

ーーーー

ヒュウゥゥゥゥ…

ドンッ！！

空を裂き、突然響き渡る大砲のような音に、カミュは、敵襲か！とばかりに驚き、思わず跳ね起きた。

それは横にいたベロニカも同じであったようで、慌てて横にあった己が杖を手にする。

が、カミュの両手は赤子で塞がっており短剣を抜けず、ベロニカは余程深く眠ってしまっていたのか、突然の覚醒に動きがおろおろとぎこちない。

が、二人の心配は杞憂に終わる。

「げ！もうこんな時間か！」

「ちょ、ちょっとゆっくりし過ぎたわね…」

外は既に暗く、星々の瞬くその夜空には、花火が打ち上げられていた。

もう、例の祭りが始まっているらしい。

「ふぇぇ…」

「わ！た、タンマ！悪かった！泣くな！」

跳ね起きたカミュの腕の中で、無理矢理起こされたご機嫌ナナメの赤ん坊が愚図る声を出す。

すかさずベロニカが哺乳瓶を赤ん坊に咥えさせる。するとそれは泣き出すことなく、ちゅうちゅうとミルクを吸い始めた。今度こそお腹は空いていたのだろう。

「子育てって大変だな…母は強しとは聞いたことがあるけどよ、こりゃ強くなるわ」

再びその場に腰を下ろし、赤子にミルクをやるついでに始まった花

火を見物する二人。

「やっと分かったの？ていうか、あんたなんでそもそも子守なんてしてるのよ？」

「ん？あー…なんでだっけな…？」

「惚けるんじゃ無いわよ。いいわよ、帰ったら女将さんに聞くだけだから」

引き下がらないベロニカに、どうせバレてしまうと判断したカミュは、渋々白状する。

ベロニカはじろりとカミュを睨み、自業自得と言って、ぷいと顔を背けた。

出会う前に彼の犯した罪を責めることは出来ない。
だが、こうして共に旅をするようになってからのことは別に怒ったっていい。

「そう言えば、俺も聞きたいことあったんだよな」
「何よ」

ぷくりと頬を膨らませたまま、一人打ち上がる花火を見ていたベロニカに、カミュは疑問を投げかけた。

「なんで俺と会った時、粉ミルク持ってたんだ？」

今度はベロニカが、ギクリとする番であった。

折角の休日だった。

想い人と少しくらい共に時間を過ごしたい、と思うのは贅沢だったのだろうか。

カミュなら宿に帰ったよーと、意味深なイレブンの発言を受け、とりあえず宿に帰り、なんとか外に連れ出してやろうと色々とイメージトレーニングをしていたのだが。

カミュは自分から出てきた。しかも、何故か赤ん坊を抱いて。

暫く観察することにしたが、気配に敏いカミュがつけられることに気付かなかったのは、余程動揺していたからだろう。

仲間の目を避けながら、時折泣きそうになる赤ちゃんをあやす彼が、なんとも微笑ましく。

あいつも、あんな風に父親になるのかと思った。

そして、その傍には誰がいるのだろうか。

もし叶うのであれば。

元の身体に戻った自分が、その傍に寄り添っていてはダメだろうか。

そんなことまで考えてしまった。

結果、遂にお手上げ状態のカミュに、ベロニカは素早く粉ミルクを買い、それを差し出したのだ。

「あ、あんたをたまたま町で見かけた時、泣いてる赤ちゃんを抱いてたからよ！急いで粉ミルク買いに行ったんだから！」

「へぇ…？」

半分嘘で、半分本当の言い訳を聞き、カミュは悪戯っぽく笑う。

質問した時、明らかにベロニカが動揺したことを流石にカミュは見逃していなかった。

「なによ！レディの親切心を疑ってるの？！信じらんないっ！もう帰るわ！」

「待てよベロニカ」

ぷりぷり怒り出した少女の手をカミュは引き、膝上に乗せる。

突然のことにベロニカはキョトンとしている。

カミュは片手で赤ん坊を抱き、もう片手で膝上に乗せたベロニカを抱き止めた格好だ。

流石は二刀流。やることが器用である。

「な、何すんのよー？！！」

ようやく状況を理解した顔を真っ赤にしたベロニカがぽかぽかとカミュの胸を叩く。

先程肩を寄せ合って寝てしまった時とは違い、この格好では触れ合っている部分が多過ぎる。
悲しいかな、いきなりそんなダイタンなことをされて身を預けられるほど、ベロニカにはカミュに対する耐性がなかった。

「もう少し、ここで一緒に花火観てようぜ。こいつも楽しんでるみてえだし」

そう言ってカミュは、くいと顎で赤ん坊を指す。

ピュアなる赤ん坊は、今のこの状況が楽しいのか、花火が面白いのか分からないが、無邪気にきゃっきゃっと笑っている。

「なっ、なっ、なっ…！」

口をパクつかせて絶句するベロニカを尻目に、カミュは、打ち上がる花火に、「おお、綺麗じゃねえか」などと白々しく宣っている。赤子もだぁだぁと満足気だ。

(これじゃあ本当に…)

それは、ベロニカが一瞬思い描いた幸福なワンシーン。

(……家族みたいじゃない…)

ーーそれは、遠くない未来、そんな日が来るかもしれないと期待させる、休日のひと時のこと。